＜演題名＞第一卵割での Direct Cleavage の有無は Day3 良好胚選択の有用な指標とならない

＜施設名＞医療法人三慧会　IVF 大阪クリニック
＜発表者＞稲場　美乃
＜共同演者名＞村重 紘志　中西 麻実　水野 里志　井田 守　福田 愛作　森本 義晴

【目的】移植胚の選択には従来形態学的評価や発育速度が用いられている。近年、タイムラプス（ES）の導入により培養環境を維持して胚の連続観察が可能となり、新たな胚評価法が導入されつつある。Direct Cleavage（DC）もその一つである。DC とは一つの細胞が 2 細胞を経ず 3 細胞以上に分割する現象である。DC が観察された胚では観察されなかった胚に比し発育が不良であると報告されている。今回、Day3 良好胚選択において、DC の有無が有効な指標になり得るか検証した。

【方法】2013 年 6 月から 2016 年 12 月までに ICSI 症例で ES による Day3 までの観察培養を行った 84 症例 91 周期の移植可能胚 241 個を対象とし以下の検討を実施した。形態学的および発育速度による従来法と DC を加味した評価法（DC 評価）の 2 法により胚評価を行った。それぞれの評価法により周期中の最良好胚を決定し、2 つの評価法に相違の出た周期の割合を算出した。さらに、DC 陽性胚を移植した 3 周期の予後を検討した。なお、DC 評価では、まず従来法により胚の優先順位を決定し、その中で DC 陽性胚の順位を一番低くした。全胚が DC 陽性と出れば胚の順位は従来法に従った。

【結果】従来法と DC 評価で、最良好胚が異なった周期の割合は 7.7%(7/91)だった。DC 陽性胚を移植した 3 周期では、妊娠率と生産率はともに 33.3%(1/3)だった。

【考察】DC を胚評価の指標とすることで、従来法で選択された最良好胚が変更になる症例の割合は 10％未満であった。今回は分割期胚が複数個得られた症例のみを対象としているが、分割胚が 1 個しか得られず選択の余地のない症例では、DC 評価の必要性はさらに低下する。さらに、DC 陽性胚を移植した場合でも健児が得られていることから、第一卵割における DC 評価法単独では、Day3 良好胚選別の有用な指標となりえないと考えられた。